

(十一) 円通寺 福山市神辺町東中条

山号を「玄洞山」と称する真言宗大覚寺派の寺院。本尊は聖観音菩薩
昭和十九年（一九四四）火災にあい、書類・記録等も焼失したと
のことである。東中条の奥に建つ寺院である
高野山真言宗玄洞山広山寺に隣接する。

茶山詩「圓通寺同諸子賦」の「円通寺」は「玉島」（倉敷市）か それとも「神辺町」（福山市）の円通寺なのか

「黄葉夕陽村舎詩」の中に次のような詩が収録されている。

圓通寺同諸子賦 後編 卷四―一四
春風三月古禅房 春風 三月 古禅房
房後房前花木香 房後 房前 花木香（かんば）し
每得一詩随手寫 一詩を得（え）る毎に 手に随（したが）つて写す
吟箋無字不詔光 吟箋 字として 詔光（しようこう）ならざるは無し

箋 詩文や手紙を書くのに用いる美しい紙 詔光 春の美しい景色

この詩にはちよつと違和感を持った。

それは、この詩が「玉島の圓通寺」で詠まれた詩であるとしているからである。玉島の円通寺からは瀬戸内海が一望できる景勝の地にもかかわらず、茶山はそれには全く触れていない。茶山は尾道や宮島など近隣の景勝地を訪ねて詠んだ詩にはその景色や故事に触れている。この詩は春の花々が咲き誇っている情景があるだけであるからである。

一 倉敷市玉島にある円通寺とされている書籍

- 「文化十年三月二十日、茶山は道光上人等数人を連れて玉島の円通寺を訪問し、風光を楽しんだ」として、右の詩を掲載している（『玉島旧柚木家ゆかりの人々』岡山文庫）
- 三月二十日に茶山は、道光上人、太田孟昌、竹田器甫、平松溪とともに備中國玉島の圓通寺に遊んだ。茶山は「圓通寺同諸子賦」と題して、右の七絶を作ったが、圓通寺は若い良寛が國仙和尚に従って寛政七年ごろまで修禪していた寺である。（『菅茶山 下』富士川英郎）
- 文化十年三月二十日、道光上人、太田孟昌、竹田器甫、平松溪と玉島円通寺に遊ぶ（茶山「円通寺同諸子賦」（菅茶山略年表） 菅茶山記念館）

二 どこにある「円通寺」なのか

円通寺をインターネットで検索すると、近隣では次のように表示される。
岡山県内では倉敷市と苫田郡鏡野町に、広島県では庄原市、島根県は鹿足郡吉賀町にある 中でも倉敷市にある円通寺は、若き日の良寛上人が修行をした寺として有名である。地元の神辺町東中条にも円通寺が存在する。



円通寺全景（東中条）



玉島 円通寺（顕彰会研修旅行）

(一) 玉島 円通寺（岡山県倉敷市玉島） 円通寺ホームページより

円通寺の山上、石組の庭と葦屋根の荘重な伽藍が配置された境内は、訪れる者に、精神世界への自らなる敬仰の念を抱かせる場として久しく伝えられております。昭和四三年には名勝地として岡山県の史跡指定をうけ、また全山は倉敷市営の円通寺公園として近隣諸県にその名を知られております。円通寺の歴史は古く約一二〇〇年前、現在の倉敷市玉島の地に行基菩薩によって星浦観音の霊場が開創され、その後、元禄十一年（一六九八年）徳翁良高禅師によって曹洞宗寺として開山されました。爾来三百年、代々の住職には名僧多く特に第十世大忍国仙和尚の代、若き日の聖僧良寛様が二十二才から十数年修行された禅寺として、当山は生地越後（新潟県）のみならず全国崇敬者の間に広く知られております。

三 茶山詩の「円通寺」を探す。

茶山日記の中に、文化十年（一八一三）三月廿日と前後の記述が次のようにある。

十八 晴 元俊 爲蔵辞去
 十九 陰 西山孝恂 中原子幹 小野泉蔵 叔姪小野恒三郎来 各有贈
 廿日 晴寒 与光師・孟昌 竹田 平松 同赴円通寺韻 過茂市 廣山寺 車屋使人要帰路
 遂過留飲至暁 三原丹羽源次兵衛使人来惠酒 安二郎没
 廿一 陰寒 東三郎来 孝恂来飲
 * 過 立ち寄る。 要 引きとめる

「廿日の日記」の内容は

「二〇日、晴れの寒い日、光師、孟昌、竹田、平松とともに円通寺に赴き詩を詠む。茂市宅、廣山寺に立ち寄る。車屋が人をつかわして帰路に迎えさせる。車屋宅でお酒を飲んで朝になった。三原の丹羽源次兵衛が人を使わせて酒を贈ってくれた。安二郎が没する」とあるので、円通寺に登り詩を詠んだことがわかる。ここに記載された人物は次の通りである

十八日 元俊 中西元瑞 安芸の人 中西井織養子 後広島藩医
 爲蔵 絲川爲蔵 父が大坂の福山藩邸の蔵奉行 弟子
 十九日 西山孝恂 西山拙斎次男 儒者
 中原子幹 備中国上成村（玉島）の豪農
 小野泉蔵 備中国長尾村（玉島）の人 弟子
 小野恒三郎 小野泉蔵の叔姪
 廿日 光師 道光上人 出雲法恩寺住職
 孟昌 福山藩御側用人太田全斎の子で太田孟昌 子昌は字 弟子
 竹田 竹田器甫 弟子、後福岡藩儒
 茂市 円通寺の近くの人物と考えられるが不明
 廣山寺 円通寺に隣接する寺院と考えられる
 車屋 福島仁助 車屋は屋号 茶山日記に「車仁助」という名前が再三見られる。
 三原の丹羽源次兵衛、安二郎については不明
 廿一 東三郎 桑田翼叔 備後山南の人、東三郎は通称



円通寺本堂（東中条）

この日記から次のことがわかる

① 「圓通寺同諸子賦」の「同諸子」は、道光上人、太田孟昌、竹田器甫である。帰路に「茂市

宅、廣山寺」に立ち寄る。さらに、「車屋仁助に帰り道に引きとめられて、酒を飲み、暁に至ったとある。

② 前日の十九日、鴨方の西山孝恂、玉島の中原子幹、小野泉蔵、小野常三郎達が茶山を訪ねているが二十日の同行者の中にはいない。

③ 次の日二十一日には、また西山孝恂が訪ね来て共に酒を飲んでいる。

四 東中条の円通寺とするのが妥当ではないか。

① 「円通寺で詩を詠み茂市、廣山寺に立ち寄った」とある。「茂市」が地名なのか、茶山と親しかった人物なのか不明だが、「廣山寺」にも立ち寄ったとある。玉島周辺には廣山寺は見当たらないが、東中条には円通寺に隣接して「廣山寺」がある。

② 「車屋使人要帰路」とあり、「遂過留飲至暁」と続く。「車屋」は日記の中にも見える。人物で「文化八年四月五日 廣山寺上人 円通寺主 車仁助来」とあり、仁助と親しい関係にあったことがわかる。(仁助はたびたび茶山を訪ねている)

* 武田武美氏(神辺町中条在住、郷土史家)によると、西中条箱田川沿いに建つ「鶴の慰霊碑」の西側に水車で米つきを生業とする家があり、「車屋」と呼ばれていたとのこと。

③ 詩中の「同諸人」の中に西山孝恂、中原子幹、小野泉蔵達の名はない。彼らは円通寺に登る前に茶山を訪ねており、二十日は別行動だったのではないか。事前に茶山一行が玉島円通寺を訪れることがわかっていれば、前日に茶山宅を訪れることはなかったであろう。

④ 玉島に向くとすれば、笠岡を抜け、鴨方往来を通り、玉島へ出向くのが一般的であろう。廉塾と玉島の距離は約二十五〜三十kmある。駕籠を使っても日帰りでは往復することはまずできないであろう。また、庄原市にある円通寺についても距離的に同様であろう。

⑤ 詩の内容についても、玉島円通寺で詠んだ詩であれば、「風光明媚な瀬戸内海」や円通寺からの展望の様が述べられてもいいのではないか。その文言が見当たらない。

五 まとめに変えて

二〇一九年十一月 菅茶山顕彰会研修旅行で、鴨方(拙斎・索我)玉島(西爽亭・円通寺)等の訪問が組まれた。旅行のしおりづくりの中で、茶山詩「圓通寺同諸子賦」を知る。しかし、郷土史家林多恵子先生から「円通寺は、「神辺東中条」の円通寺ではないか」という教示を受ける。検討してみると、茶山詩にある「圓通寺同諸子賦」の円通寺は、神辺東中条の円通寺であると結論に至った。「円通寺」と言えば、良寛修行の玉島「円通寺」が有名であったので、間違った記述がされたのではないか。詳しい検討が今後必要である。中条では、遍照寺、松風館などが茶山詩に度々みられるが、また新しく「円通寺」で詠まれた詩があることが判明したことはうれしい限りである。林多恵子先生に感謝したい。

【付録一】 茶山日記にみられる「円通寺」関連の記述

文化八年	4/15	廣山寺上人 円通寺主 車仁助来	
(一八一)	5/19	諸子上円通寺	* 寺主 仏教の僧侶の役職の一つ。
文化九年	1/22	円通寺上人来	寺院内の事務を管轄した。
(一八一)	2/5	円通寺上人携剛忍来	(出典 ウイキペディア)
	2/26	円通寺上人使仁助戒往看花	* 戒 つげる

文化一〇年 (一八一三)	7/9 3/5	剛忍・円通上人来 円通師携二僧来 乞教也
文化十三年 (一八一六)	3/20 6/8	(前述) 円通寺上人来作書
文化十四年 (一八一七)	11/3 12/6	円通上人来 円通寺恵海苔
文政二年 (一八一七)	3/22	円通寺主來告別 欲之高野也
	1/20	円通寺主來

*之 行く
*欲 くしようとしている

参考文献

- 「黄葉夕陽村舎詩」復刻版 児島書店
「菅茶山 上下」 富士川英郎
「菅茶山略年表」 菅茶山記念館
「玉島旧柚木家ゆかりの人々」 倉敷ぶんか倶楽部編
「茶山日記」
円通寺（玉島）ホームページ